

「帝国の想起」と「資本の夢」

— ヴァルター・ベンヤミン『1900年頃のベルリンの幼年時代』

『パサージュ論』における〈想起〉¹

>Erinnerung an das Deutsche Reich< und > Traum des Kapitalismus<

— >Eingedenken< in Walter Benjamins »Berliner Kindheit um neunzehnhundert«
und »Das Passagen-Werk«

三宅晶子

I. 『1900年頃のベルリンの幼年時代』 — 帝国の想起

O braungebackne Siegessäule

mit Winterzucker aus den Kindergarten.²

おお こんがりと焼きあがった戦勝記念塔よ

幼き日々の 冬の砂糖をまぶされて

ヴァルター・ベンヤミン『1900年頃のベルリンの幼年時代』（最終稿）エピグラム

1. 『1900年頃のベルリンの幼年時代』の形成過程と想起の方法

1892年、ドイツ帝国の首都ベルリンに生まれ育ったベンヤミンは、1932年4月～7月、スペインのイビサ島滞在時に、ベルリンとの永続的な「別れ」を予感しつつ、幼年から青年時代を回想する覚書『ベルリン年代記』³を書き始めた。しかし秋にベルリンに戻ると、新たな『1900年頃のベルリンの幼年時代』という構想のもと改稿し、上記テキストの中から幼年時代のモチーフを作品化して、1932年末から『フォス新聞』等に原稿を発表して

¹ 本論文は、以下の論文を受けて、「青島・烟台をめぐるドイツ・日本・中国の文化的記憶 <II>」として構想されている。

三宅晶子「青島・烟台をめぐるドイツ・日本・中国の文化的記憶 <I> ドイツの「模範的コロニアル都市」チンタオ」三宅晶子編『文化における想起・忘却・記憶』千葉大学人文社会科学部研究プロジェクト報告書第268集、2014、pp.1-12.

前稿では、極東において「模範的コロニアル都市」「東のベルリン」と呼ばれたチンタオ都市建設とその後の想起について考察したが、本論文では、このコロニアルな力を行使したドイツ帝国は、少年ベンヤミンによってどのように体験され、ナチス期の「現在」からどのように想起されているかを考察し、時代を駆動し続ける資本主義が提示する夢を分析する。

² Walter Benjamin: Berliner Kindheit um neunzehnhundert <Fassung letzter Hand>. In: Walter Benjamin Gesammelte Schriften. VII. 1. Frankfurt a.M.(Suhrkamp)1989, S.385.

本論では、ベンヤミンのテキストは、上記ゾールカンパ社版の全集を使用し、表記には略語GS.を用いる。出典は、引用文末の()内に、GS.の後、巻・分冊のナンバーと、頁(略語S.)を記す。訳文は、三宅による。

³ この原稿は完成されることなく未完に終わり、戦後1970年になって友人のゲルショム・ショーレムによって『ベルリン年代記』(Berliner Chronik)として刊行された。全集では、以下に収録されている。GS.VI.S.465-519.

いった。

しかしベンヤミンが抱いていたベルリンとの別れの予感は的中した。翌 33 年 1 月 30 日ヒトラーが首相に就任し、ベンヤミンは 3 月中旬、永久にベルリンを立ち去ることになるが、その後も亡命先で原稿を書き、匿名で新聞や雑誌に発表し、さらに推敲し続けた。『1900 年頃のベルリンの幼年時代』には、1932 年秋から 1938 年最終稿まで 6 つのヴァージョンがある。初めて出版されたのは、テオドール・W・アドルノによる 1950 年「アドルノ稿」で、「ティーアガルテン」「皇帝パノラマ館」に始まり「せむしの小人」で終わる 37 篇が収録されている。1972 年に Suhrkamp 社版全集第 IV 巻として出版されたのは、このアドルノ版に修正・増補を加えた 41 篇である (Berliner Kindheit um Neunzehnhundert. GS.IV.1.S.235-304 アドルノーレックスロート稿)。だが、その後、1981 年にパリのフランス国立図書館で、ベンヤミン自身によって「最終稿」と記された原稿 (1938 年完成) が発見され⁴、全集 VII 巻で出版された (Berliner Kindheit um neunzehnhundert. <Fassung letzter Hand>. GS.VII.1.S.385-433)。

1938 年の最終稿で彼は、それまでであった息子シュテファンへの献辞⁵を削除し、テキストの順番を変更し、テキスト中の数か所を削除した。他方、この作品の意図と方法を明らかにするために新たに「<序>」(<Vorwort>) を付している。彼は、その冒頭で、ここでの想起のあり方について、次のように記している。

<序>

1932 年に外国にいた時、私には、自分が生まれた都市に間もなくある程度長期にわたって、いやもしかすると永続的に、別れを告げねばならないかもしれない、ということが明らかになりはじめた。

私はかつて、自分の内面生活で、予防接種 (Impfung) という方法が役に立つものであることを、幾度か経験していた。そこでこの状況においても、私はその方法をよりどころとして、亡命生活においてはいつも最も強く郷愁(Heimweh)を呼び覚ますイメージ — 幼年時代のさまざまなイメージ — を、意図的に私の内部に呼び起こした。その際、ワクチンが健康な身体を支配してしまっはならないのと同様に、憧憬の感情 (das Gefühl der Sehnsucht)が精神 (Geist)を支配してしまっはならなかった。私は、過ぎ去ったものの偶然的な伝記的回復不可能性ではなく、その必然的な社会的回復不可能性 (die notwendige gesellschaftliche Unwiederbringlichkeit)にまなざしを向けるこ

⁴ ベンヤミンは、ライフワーク『パサージュ論』のために、パリ陥落ぎりぎりまでパリの国立図書館で仕事を続けていたが、1940 年 6 月、パリを脱出する。その際彼は、『パサージュ論』草稿と『ベルリンの幼年時代』最終稿を、当時図書館長だったジョルジュ・バタイユに預けた。『パサージュ論』は戦後、ピエール・ミサックによってアメリカにいたアドルノのもとに送られたが、『ベルリンの幼年時代』最終稿の存在は、1981 年まで知られていなかった。

⁵ Berliner Chronik では、冒頭に、息子シュテファン (離婚後は妻ドーラに引き取られていた) への献辞 für meinen lieben Stephan 「愛するシュテファンに」が、全集 IV に掲載された版 Berliner Kindheit um Neunzehnhundert でも、meinem lieben Stephan.の献辞がなされている。

とによって、この憧憬の感情を抑制しようとしてつとめた。

・・・大都市の経験は市民階級のひとりの子どもにおいてイメージの中で沈殿しているのであり、私はそのようなイメージ (*Bilder*) が生き生きと現れるよう努力した。

このようなイメージにはある固有の運命がとっておかれている、ということがありうると私は思う。・・・大都市での私の幼年時代のイメージは、もしかすると、その内部において、のちの時代の歴史的な経験を予め形成する(*präformieren*)能力を与えられていたかもしれないのだ。これらのイメージにおいて、少なくとも、— そう私は希望するのだが — ここで話題となっている人物が、その幼年時代には恵み与えられていた庇護された安らかさ(*Geborgenheit*)を、のちにどれほど深く断念することになったか、そのことにたぶん気づかされるだろう。 (GS.VII 1..S.385)

(下線は論者、傍点は原文イタリック。以下同様)

ベンヤミンが 1932 年に予感した「永続的な別れ」は、単にベルリンとの別れだけでなく、生との別れへと導く深甚な深みをもったものだった。32 年 7 月 27 日、フランスのニースのホテルで彼は自殺の準備を整え、遺言状と 4 通の別れの手紙を書いた。⁶しかしその自殺計画は未遂に終わる。彼はその後もこの『ベルリンの幼年時代』のテキストを書き続け、推敲し続けるが、1938 年の最終稿では、「憧憬の感情(*das Gefühl der Sehnsucht*)が精神 (*Geist*) を支配してしまっはいけない」と深く認識し、「過ぎ去ったものの偶然的な伝記的回復不可能性にではなく、必然的な社会的回復不可能性にまなざしを向けることによって、憧憬の感情を抑制しようとしてつとめ」、この方向に向けて最終的にテキストを編集・削除・改変していった。

ところで、これまでの版には、冒頭に、「愛するシュテファンへ」という献辞があったが、この、もう会えないかもしれない息子への献辞を冒頭に書き記すという痛切な刻印は、彼がこれまで「予防接種」と呼んでいた方法—「亡命生活においてはいつも最も強く郷愁を呼び覚ますイメージを、意図的に私の内部に呼び起こした」方法のひとつだったのかもしれない。しかしまた、それは、「過ぎ去ったものの偶然的な伝記的回復不可能性に」強く「まなざしを向け」、「憧憬の感情に精神を支配」させてしまいかねない刻印となっていた。この危険を回避するために、「憧憬の感情」を溢れさせかねない献辞をタイトル下から取り除き、より「必然的な社会的回復不可能性」をイメージとして提示する「戦勝記念塔」のエピグラムのみを残した、と考えられる。

彼はここで、「大都市での私の幼年時代のイメージは、もしかすると、その内部において、のちの時代の歴史的な経験を予め形成する能力を与えられていたかもしれない」として、その「イメージ」を捉え、テキストを推敲し続けた。彼が「イメージ (*Bilder*)」をイタリ

⁶ 論者は 1986 年、旧東ベルリンのベンヤミン・アルヒーフでこれらの手紙を閲覧した。これらの手紙についての報告、特にユーラ・ユーン宛てのテキストの解釈については、三宅晶子「ベンヤミンの愛の手紙」『ドイツ文学』78 号 1987 年春号、pp.205-209. 参照。

ックで強調したように」、ここでは、歴史的な出来事の客観的な記述が目指されているのではない。個人の生が都市・時代と出会って意識下に沈殿させていた一回限りの「イメージ」—— 未来を孕む現在、危機の現在から痛切に想起される過去 —— こそが捉えられようとしている。

こうして彼はこの序文を、「これらのイメージにおいて、少なくとも、— そう私は希望するのだが — ここで話題となっている人物が、その幼年時代には恵み与えられていた庇護された安らかさ(Geborgenheit)を、のちにどれほど深く断念することになったか、そのことにたぶん気づかされるだろう」という一文で終えているが、ここで想起されていある一人の子ども（ベンヤミン少年）の「庇護された安らかさ」が深く断念されなければならなかったのみならず、彼の、そして何千万人もの人々の生存そのものが深く断念されねばならない事態になっていったことを、私たちは知っている。そしてその事態は、個人の偶然的な伝記的出来事ではなくて、「必然的な社会的回復不可能性」とともに起こったのだ。

ベンヤミンが1938年（1940年ポル・ボーでの自殺の2年前）にまとめた最終稿では、上記「<序>」を書き加えた後、これまでのテキストの順番を変えて、冒頭を「ティーアガルテン」から「ロツジア」に変更し、また、最後の「せむしの小人」の後に、さらに「<付>」（Beilage）として「回転木馬」と「性の目覚め」を置き、最終的な構成を確定した。この構成は、この作品全体を貫く想起の働き方とその対象のあり様を体現するものになっていると思われる。

まず冒頭のテキストが、「都市に迷うこと」の意味を叙述する「ティーアガルテン」ではなくて、より幼い、最初期の揺り籠の中の記憶を述べる「ロツジア」に差し替えられ、記憶の初源の風景が、そしてベルリンにおけるロツジアの時間空間的意味が、想起の起点に置かれた。

終結部に関しては、「せむしの小人」が最後の重要なポジションを占めることに変わりはないが、最終稿ではそのあとにさらに「回転木馬」と「性の目覚め」が置かれている。

せむしの小人 (Das bucklichte Männlein)

まず「せむしの小人」の意味について検討する。この形象は、アーヒム・フォン・アルニム／クレメンス・ブレンターノ編『少年の魔法の角笛 — 昔のドイツの民謡』（1808年）の「せむしの小人」に由来するが、その後もベンヤミンのテキストの重要な場面で姿を現している。まず、『ベルリンの幼年時代』では、次のように描かれている。

「ぶきっちゃんさんがよろしくと言ってる」と母は、私が何かを壊したり、つまずいて倒れたりするたびに、言っていた。今の私は、母が誰のことを言っていたのか、分かる。母が言っていたのは、せむしの小人のことだった。その小人は私を見つめていた。この小人に見つめられた者は注意力を失う。自分自身に対しても小人に対しても。そして割れたかけらの山を前にして途方に暮れるのだ。 [・・・]

小人はいたるところで私の先回りをした。先回りして、邪魔をするのだった。けれども、彼、この陰気な代官は、私が手に入れたものすべてのうちの半分、忘却という半分 (den Halbpakt des Vergessens) を取り立てること以外に、私には何もしなかった。「わたしの小さなお部屋に行って／ムースを食べようとしたら／そこにせむしの小人がいて／とっくに半分食べちゃってた。」そんな風に小人はしばしば現れた。しかし私
 がその姿を見たことは一度もなかった。いつだって、彼が私を見ていたのだ。

(GS.VII.1.S.430)

この小人は、人が人生において失敗とともに無意識のうちに生きた生を「忘却」という形で記憶のアーカイヴにとりこみ、「経験」化していく、「無意志的記憶」の代理人とも言うべき形象である。

小人についての説明は、最終稿の前のアドルノーレックスロート稿では、上記引用部分に続けて以下のテキストが続いていた。

それも、私の方から見ていないと、それだけいっそう鋭いまなざしで。

死に瀕した者の眼前をその<全生涯>が通り過ぎて行く、と人々は言うが、その<全生涯>(jenes »ganze Leben<)とは、小人が私たち誰もについて持っているイメージ像 (Bilder) の数々から成り立っている、と想像される。(GS.IV.1.S.304)

人生の最後に見ると言われる<全生涯>の像、それは、この、人を見つめ、人の注意を奪い、その間に出来事の半分以上を「忘却」として取り立てるといふ小人が各人について持っている像、即ち、無意識的記憶の中にとりおかれている生涯の経験の数々から成り立っているのだ。そしてこの<全生涯>のイメージについて、「物語作者」(Der Erzähler) (1936年)では、さらに次のような説明が見られる。

人生の終わりとともに人間の内部に一連のイメージ像が動き出す。それは、意識することなく自分自身に出会っていたときの、彼自身のさまざまな姿 (Ansichten der eigenen Person, unter denen er [der Mensch], ohne es inne zu werden, sich selber begegnet ist) から成り立っている。(GS.II.2.S.449f.)

即ち、人生の終わりに通り過ぎるといふ<全生涯>の像についての上記二つの記述を照らし合わせるならば、「小人が私たち誰もについて持っている像 (Bilder) の数々」＝「意識することなく自分自身に出会っていたときの、彼自身のさまざまな姿」ということができる。意識において生きられてきた生ではなくて、無意識のうちに自分自身の核心に出会い、いわば忘却を通して無意識的記憶の中に保存されていた、生の意味を秘めた経験の数々、それはまた、「物語作者」の記述によれば、「物語(Geschichte)が生み出される素材」

(GS.II.S.499)である。

そしてこの像を「忘却」として取り込む「せむしの小人」という形象に、ベンヤミンは、論文「フランツ・カフカ」(1934年)において、カフカの作品に登場するオドラデクやザムザや「雑種」等、「一連の長い列をなしている歪みの原像」を見ている。

オドラデクは忘却の中の事物がとる形である。そうした事物は歪められている。いったいそれが何なのか誰にも分からない。「家父の心配」の種は歪められている。われわれにはグレゴール・ザムザであることが分かりすぎている、あの毒虫は歪められている。ことによったら「肉屋の包丁がひとつの救済」(「雑種」)であるかもしれない、半ば子羊で半ば子猫のあの大きな動物は歪められている。カフカのこうした形象は、しかし一連の長い列をなして歪みの原像に、すなわちせむしに (dem Urbilde der Entstellung, dem Buckligen) 結びついている。・・・

「せむしの小人」は、人を見つめて注意を失わせ邪魔をするのみならず、自分自身が「歪みの原像」なのである。ベンヤミンは、上記テキストの後、カフカの日記から、彼の「重装備した兵士のような」姿での眠りについての記述を引用した後で、次のように述べている。

明らかにここでは、重荷を負わされていることは、忘却 — 眠る者の忘却 — と結びついている。「せむしの小人」において民謡は同じことを象徴的に表現したのだ。この小人は歪められた生の住人(der Insasse des entstellten Lebens)である。メシアは暴力によって世界を変えてしまおうとはせず、ただほんの少しだけ世界を正すだろう、とある偉大なラビは言ったが、そのメシアが来たときにはじめて、この小人は消えて行くことだろう。

「私が私のお部屋に行って／私のベッドを作ろうとすると／せむしの子どもがそばに立って／とめどもなしに笑い出す」。それは、「たとえば落ち葉の中でかきこそ音がするような響きである」と言われるオドラデクの笑い声である。「私が私のお祈り台に膝ついて／ほんのちょっぴり祈ろうとすると／せむしの小人がそばに立って／とめどもなしにしゃべりだす／かわいい子どもよ お願いだから／せむしの小人にも 祈っておくれ！」そう、民謡は終わる。この民謡の深みにおいて、カフカは、「神話的に予感する知」も「実存的神学」も彼に与えることのない基盤に触れている。それは、ユダヤと同様にドイツの民衆の基盤 (der Grund des deutschen Volkstums so gut wie des jüdischen.) なのだ。(GS.II.2.S.431f.)

ここでは、せむしの小人は「歪められた生の住人」と言われている。小人は、失敗と忘却を体現する形象であり、メシアがそっと正そうとする対象である歪みを引き受けるもの、

そして、だからこそ、子どもに「せむしの小人にも祈っておくれ！」と祈りを求める存在だ。

そしてこのように、メシアによる救済の対象である歪みを体現し、祈りを求める存在としての「せむしの小人」を、ベンヤミンは、彼の遺言にも等しい最後の作品「歴史の概念について」(Über den Begriff der Geschichte) (1940年)の冒頭第1テーゼ(GS.I.2.S.693)に登場させ、「トルコ人形」＝「歴史的唯物論」(historischer Materialismus)の中に「神学」(Theologie)として招き入れたのだ。「今日では周知のように小さくて醜く、そうでなくても姿を見られてはならない」「せむしの小人」(ein buckliger Zwerg)の姿で。

「せむしの小人」の形象は、ドイツ民謡の古層で受け継がれ、子どもたちの日常の中に生き続けてきた。それはベルリン生まれのユダヤ系市民であるベンヤミンにとっては幼年期の無意識の中で出会ったかけがえのないイメージであり、プラハ生まれのドイツ語を母語とするユダヤ系作家カフカの想像力もまた、この奥深い「ユダヤと同様にドイツの民衆の基盤」に触れている。そして、この『1900年頃のベルリンの幼年時代』終結部に置かれた「せむしの小人」テキストの最後でも、ベンヤミンはこの小人の「祈っておくれ！」という願いの声を、世紀の敷居越しに聴こえてくるガスマントルの音のように聞かせている。

この小人はとっくの昔に退任してしまった。しかし、ガスマントルがジージー鳴るような彼の声が、世紀の敷居越しに、私にこんな言葉を囁きかけてくる—「かわいい子どもよ お願いだから／せむしの小人にも 祈っておくれ！」»Liebes Kindlein, ach ich bitt, / Bet' für's bucklicht Männlein mit!« (GS.VII.1.S.430)

さて、最終稿の配列では、この後、<付>として、「回転木馬」と「性の目覚め」が付されている。歴史認識的な構成としては、27番目の「月」、そして30番目の「せむしの小人」で終わることで充分であろう。「月」では、「月から流れ落ちてくる光」に照らし出された「反地球あるいは副地球」が描かれているが、アドルノーレックスロート稿では、最後の段落で「幼年時代の終わり」の様子がさらに次のように印象深く描かれていた。

幼年時代はもうほとんど終わりかけていた。(Die Kindheit lag schon beinahe hinter mir.)
 …私はすでに〔悪夢から〕目覚めていた。そのとき初めて、月が私に覆いかぶせていた恐れが、永遠に、慰めるすべもなく、私のもとにとどまるように思われた。というのも、この目覚め(Erwachen)は、それまでの目覚めとは違って、夢の終着点を定めるものではなくて、終着点を逸してしまったことを、そして子どもの私が経験してきた月の支配がこれ以後永遠に崩れ去ってしまったことを、私に告げるものだったのだ。
 (GS.IV.1.S.301)

こうして「幼年時代の終わり」が作品終末へと向けて準備されていく。<付>の「回転

木馬」(Das Karussell)では、回転木馬に乗ることによって感じる「母から遠ざかることへの不安」と解放、回転の陶酔、そして降りる際の母への帰着が述べられている。そして最後に置かれた「性の目覚め」(Erwachen des Sexus)では、幼年時代からの離脱の瞬間が描かれている。彼は、母によってユダヤ教の祝祭日の礼拝式に行くよう言われていたにもかかわらず、その教会への案内者となるべき親戚の所に辿りつくことができず、間に合わないという不安の熱い波に襲われ、さらにその直後に、完全な良心喪失の第2波が押し寄せてくる。そしてそれらが合流して最初の快感に変わり、「その快感の中で、祝祭日の冒涇は、街路がもつ売春への仲立ち的な感じと混じり合い(mit dem Kupplerischen der Straße mischte)、ここで初めて、街路は私に、目覚めた本能に対して街路が果たすことになる役割を私に予感させたのだった」(GS.VIII.S.432)。この目覚めと都市の街路への参入は、彼の幼年時代の終わりを示すとともに、『パサーージュ論』の都市論への道標を設置するものでもある。

2. ロジgia — 揺りかごから霊廟へ

ここでまず、ロジgia (Loggia) という建築用語の歴史と意味を確認しておきたい。ロジgiaとは、イタリアで生まれた建築の意匠で、イタリア・ルネッサンスでは、建物の正面に設置されたアーチと列柱つきの開口部のことを言う。フィレンツェにフィリッポ・ブルネレスキが建てた有名な捨て子保育院の1階部がロジgiaになっており、アーチの部分に赤子のレリーフが施されている。ポズナンの市役所では壮麗な3層のロジgiaが正面の印象を強めるとともに交流の場を提供している。また、フィレンツェのロジgia・ディ・ランツィのように独立した回廊として建てられたものもある。このようなロジgiaを参考にして、19世紀ミュンヘンでは、ルートヴィヒ1世の命で、建築家フリードリヒ・フォン・ゲルトナーが将軍廟 (Feldherrnhalle) を建設した。この将軍廟は、1923年11月9日にはヒトラーらのミュンヘン一揆の舞台となり、その後ナチスは、犠牲者を追悼する場として聖化し、儀式や勲章デザインに使った。19世紀ドイツでは、ロジgiaは市民の住宅にも取り入れられ、外気や外の眺めを楽しむ屋根つきのバルコニーのような場として、都市の集合住宅や高級邸宅、別荘などへと広まり、現在に至っている。



捨て子保育院 Firenze 1445



市役所 Poznan 1555年



Loggia dei Lanzi Firenze 1382



將軍廟 Feldherrnhalle München 1844



住宅のロτζア ベルリン

さて、『ベルリンの幼年時代』最終稿で冒頭に置いたテキスト「ロτζア」で彼は、「幼年時代の思い出」を次のように語りだしている。

生まれたばかりの赤ん坊を、目をさませずにとっと抱き寄せる母のように、人生は、長いあいだ、幼年時代のいまなお優しく繊細な思い出をその胸に抱いている。私の幼年時代の思い出を何にもまして親密にはぐくんでくれたのは、中庭への眺めだった。夏には日除けの陰になる、中庭に面した薄暗いロτζアのひとつこそ、この都市が新参の市民である私を寝かせた揺りかごにほかならなかった。(GS.VII.1.S.386.)

そして、上の階を支える女像柱（カリアティード）たちが一瞬持ち場を離れて彼の揺りかごのそばにやってくる歌う「言葉の魔法のような力によって中庭の空気は私には永遠に魅惑的なものであり続けた」こと、その空気の何がしかは、その後、「愛する女性をじっと抱きしめていたカプリの葡萄山の辺りにも、まだ、混じっていた」こと、「私の思考を支配しているイメージやアレゴリーにも含まれている」ことを述べ、幼年期に恵み与えられていた「庇護された安らかさ」とそこで予感した魔法のように魅惑するものを想起する。しかし、ベルリンという都市が世紀の転換期に幼児ベンヤミンをそっと寝かせた「揺りかご」である「ロτζア」の意味は、そしてロτζアをこんなにも近しく感じる郷愁の意味は、そのような安らかさと魅惑にとどまるものではなかった。その両義的で恐ろしく冷やかな意味が、テキストの最後で明かされる。

ロτζアが私にとって近いものであるのは、・・・住むということをもはやまともになしえない者にとって、ロτζアの居住不可能性(Unbewohnbarkeit)に感じられる慰めのせいなのだ。ロτζアには、ベルリン市民の住むという営みの境界がある。ベルリ

ン— その都市神 (Stadtgott) 自身 — が、ロッジアにおいて始まるのである。この神がそこに常に現前しつづけているので、どんな些細なものもこの神の傍らで地歩を占めることはない。この神の影の下、場所と時間は我にかえり、また互いに帰属し合うのだ。場所と時間はこのロッジアで、この神の足元に身を横たえている。けれども、かつてそこで盟友としてともに身を横たえていた子どもは、いま、これらの仲間に囲いこまれて、あたかもずっと以前から彼のために定められていた霊廟(Mausoleum)のなかにいるかのように、ロッジアにとどまっているのだ。(GS.VII.1.S.387f.)

このロッジアは、市民階級が濃密に住みこむために家具調度とともに作り上げた「室内空間 Interieur」（「パリ 19 世紀の首都」の「IV ルイ＝フィリップあるいは室内」参照）や「サロン」とはちがって、「住むという営みの境界」にあり、むしろ「居住不可能性」をこそ特徴としている。だからこそ、「住むということをもはやまともになしえない者」（追放されかけている者、亡命しようとする者、追跡されている者）にとっての「慰め」が、彼にロッジアを近いものと感じさせるのだ。そして実は「ベルリン」という「都市神」そのものがこのロッジアという「境界」で始まり、ここに「現前」し続けており、「この神の影の下、場所と時間は我にかえり、また互いに帰属し合う」。ロッジアは、ベンヤミンという 1 人の市民階級の幼な子と、ドイツ帝国の首都ベルリンという歴史的な都市が、経験する場と時間を胚胎し形成し、繰り返し想起されて出会い、帰属し合う場と言えよう。しかし、かつてこのロッジアでカリアティードの歌に魅せられながら安らっていた幼な子は、今、1938 年の視線から見るならば、安らかな「揺りかご」ではなく、「あたかもずっと以前から彼のために定められていた霊廟のなかにいるかのように」、冷え冷えとした孤独の中にいる。

ロッジアに始まり、ロッジアに現前し続けた「ベルリン」という「都市神」とは、どのような神なのか。幼いベンヤミンを「揺りかご」のように受けとめ、魅惑の歌声を聴かせ至福の空気をそよがせて優しく育みつつ、しかし住まい続けることの外側へと押し出していったドイツ帝国の市民社会の「神」が、まさにそこに息づいている。「住むという営みの境界」に現前し続けて場所と時間を支配する神、市民の子どもをロッジアで「揺りかご」のように受けとめ優しく育み、優しい思い出を与えながら、いつの間にかそこを死の場所である「霊廟」に変えてしまう神。そのような都市神のもとで育った個人の生とベルリンという都市が出会ったイメージを、ベンヤミンは、亡命という「居住不可能性」に追い立てられながら、書き続けたのである。

3. 戦勝記念塔 — 赤い日付から墓標へ

『1900 年頃のベルリンの幼年時代』冒頭、序に先んじてエピグラムとして掲げられているのが、本論文冒頭で引用した戦勝記念塔を描いた次の 2 行である。

O braungebackne Siegessäule
mit Winterzucker aus den Kindertagen.

おお こんがりと焼きあがった戦勝記念塔よ
幼き日々の冬の砂糖をまぶされて (GS.VII.1.S.385)



Siegessäule im Winter. Dezember 1925

Das Bundesarciv: Digitales Bildarchiv

この2行のエピグラムで描きだされたイメージにおいては、五感を揺さぶる想起が幾重にも働いている。ベルリンを象徴する戦勝記念塔の、金色の女神を戴く懐かしい像、それは、「こんがりと焼きあがった菓子」に比喻として重ねられ、口中に広がる懐かしい味を呼び起こし、そこにまぶされた砂糖とともに香り立つこうばしい焼き菓子の匂いを甘く香り立たせ、焼き立ての菓子のぬくもりと冬の日の空気と雪の冷たさを肌を感じさせる。これら、視覚・味覚・嗅覚・触覚が、冒頭、「おお」という大きく息を吐き出す感嘆詞とともに、語り手の声として聴こえてくるのだ。

この2行は、『1900年頃のベルリンの幼年時代』の原型をなす『ベルリン年代記』(1932年)にも既に、少し異なる言葉の配列で「モットー」としてテキスト半ばの段落に記されていた。

Motto: O braungebackne Siegessäule

Mit Kinderzucker aus den Wintertagen. (GS.VI. Berliner Chronik. S.488)

モットー：おお、こんがりと焼きあがった戦勝記念塔よ
冬の日々の 子どもたちの砂糖にまぶされて

さらに遡るならば、この2行は、ベンヤミンがシュルレアリスムの自動記述の影響下、ハシシュ吸引実験(1928-31年、マルセイユとベルリンで医師や友人立会いの下で行われ、プロトコルがとられた)において書いた走り書きのテキストに由来する。

In berliner Nebel
 Gottheils Berliner Märchen
 Oh braungebackne Siegessäule
 mit Nebelzucker in den Wintertagen
 Französische Kanonen überragen
 Mein Fragen. (GS.VI.S.618)⁷
 ベルリンの霧の中
 神の至福のベルリンのメルヘン
 おお こんがりと焼きあがった戦勝記念塔よ
 冬の日々の霧の砂糖をまぶされて
 フランスの大砲が聳え立つ
 私の問いの上方に

このテキストは、ハシシュ実験の中で意識と無意識のあいから自動記述的に生成したイメージを捉えている。この戦勝記念塔のイメージは、ベンヤミンにとって、ベルリンを想起する根源的なイメージ、「弁証法的イメージ」であったと思われる。普仏戦争での帝国の勝利を祝して建てられた戦勝記念塔は、戦利品としてのフランスの大砲で飾られていたが、この大砲の由来を、そしてこの記念碑の意味をを尋ねる「私の問い」は、おそらく当時大人によって答えられたかもしれないが、それでも答えられないまま残った問いの頭上に大砲は聳え立ち、この問いは長い弧を描いて現在へと至る。ベンヤミンはこのテキストを凝縮し、「冬の日々の霧の砂糖をまぶされて」という表現を、回想のキーワードである「幼い日々」を書き加えて「幼き日々の冬の砂糖をまぶされて」と書きかえ、さらに、『ベルリンの幼年時代』作品冒頭にエピグラムとしておいたのだ。

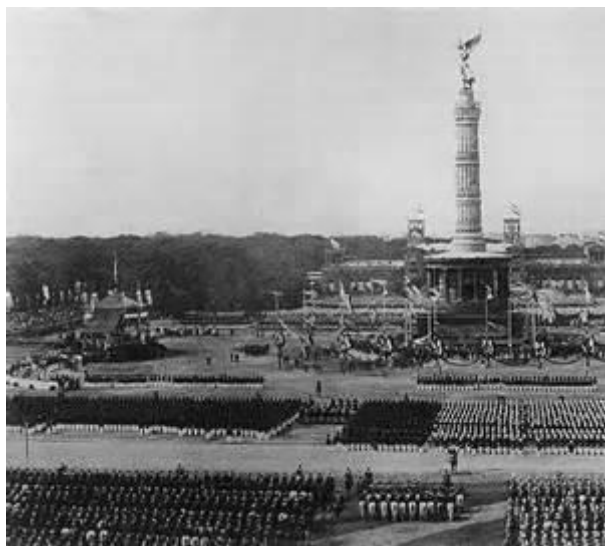
『1900年頃のベルリンの幼年時代』は、この戦勝記念塔をエピグラムとすることで、彼が「序」で述べているように、「いつも最も強く郷愁を呼び覚ますイメージ — 幼年時代のさまざまなイメージ — を、意図的に私の内部に呼び起こすことから始めた。但し、郷愁に浸るためではなくて、「予防接種」のためであり、従って「憧憬の感情が精神を支配してはならなかった」のである。

本文3番目に置かれたテキスト「戦勝記念塔」は、この「憧憬の感情に精神を支配させない」ための「予防接種」の方法とは、どのように実行されるものなのかをよくあらわしている。彼は、戦勝記念塔を、まずは「赤い日付」として次のように描く。

それは大きな広場に、日めくりカレンダーの赤い日付(das rote Datum)のように立って

⁷ Walter Benjamin: Protokolle zu Drogenversuchen.<XII><Undatierte Notizen>. In: Walter Benjamin Gesammelte Schriften VI. Frankfurt a.M.(Suhrkamp) 1991, S.618.
 「ドラッグ実験のプロトコル」XII「日付のないメモ」)

いた。最後のセダンの日(Sedantag)をめぐるのと同時に、この塔を倒すべきだったろう。私が幼かった頃は、セダンの日抜きの年など想像することもできなかった。・・・ところで、セダンのあとに何が起こりえたのだったか？フランス人の敗北とともに世界史はその栄光ある墓穴(ihr glorreiches Grab)のなかへ沈み込みこんでいったように見えた。この戦勝記念塔はそのうえに立つ墓標(die Stele)だったのだ。(GS.VII.1.S.389)



1873年の「セダンの日」の戦勝記念塔除幕式 Das Bundesarciv: Digitales Bildarchiv

戦勝記念塔は、対デンマーク戦争(1864年)勝利を記念して建設が開始され、その後の普墺戦争(1868年)、普仏戦争(1870-71年)の勝利もあわせて祝するものとして建設が続けられ、1873年完成、9月2日「セダンの日」に除幕された。「セダンの日」とは、1870年9月2日、プロイセン軍がナポレオン3世軍に決定的な勝利をおさめた日であり、これを契機にドイツ軍は勝ち進み、1871年1月18日、占領したヴェルサイユ宮殿鏡の間でプロイセン王ヴィルヘルム一世がドイツ皇帝に即位、ドイツ帝国が成立した。この「セダンの日」は重要な戦勝記念日として、その後も1918年まで祝われた。ベンヤミンはテキスト冒頭この戦勝記念塔を、砂糖をまぶされた甘い焼き菓子としてではなく、ナショナルな「赤い日付」として描き(但し、「セダンの日」は全国各地で祝されたが、国民の祝日にはなっていない)、しかし最後の「セダンの日」とともに倒すべきだった、と厳しい評価をしている。さらには、「セダンのあとに何が起こりえたのだったか？」と問うて、その後の第1次・第2次世界大戦という総力戦・大量虐殺の時代に落ち込んで行った世界史を、「栄光ある墓穴へと沈みこんでいった」と記し、この勝利を祝する塔をその上に立つ「墓標」と見なしたのだ。砂糖をまぶされた「焼き菓子」から「墓標」へ、それが「予防接種」とともに精神に対して自ら刻印しようとした「戦勝記念塔」のイメージの叙述だ。

では、この塔で祝勝されている戦争とその英雄たちはどう描かれているか。

この戦勝記念塔基部の柱廊には英雄たちの行為が金のフレスコで描かれており、ほのかな光に満ちていたが、彼ら英雄たちは、私の心の中では、つむじ風に鞭打たれ、血を流す切り株と化し、氷河の塊に氷詰めにされながら贖罪する群れ〔引用者註 ベンヤミンが伯母の客間で見たダンテ『神曲』の「地獄篇」の絵〕と同じように悪名高い者たちに思われた。だからこそ、この歩廊は地獄であり、上方の光り輝く勝利の女神ヴィクトリアのまわりに漂っている恩寵圏の対極をなすものに思われた。多くの日、塔の上には人影があった。彼らは空を背景にして、まるで切り抜き絵本の小さな人形たちのように、黒く縁どられて見えた。切り抜き絵本の家を作り上げた後で、私のはさみと糊壺を手にしたのは、その家の表玄関や壁龕や窓の下の壁のところに、あの塔上の人影に似た人形たちを配置するためではなかったか？ 塔の上方で光の中にいる人々は、それと同様の至福の気ままさから生み出された被造物のように見えた。彼らのまわりには永遠の日曜日があった。それとも、それは永遠のセダンの日(ein ewiger Sedantag)だったのだろうか？ (GS.VII.1.S.390)



戦勝記念塔の柱廊のフレスコ画

英雄たちの戦績が金色のフレスコ画で描かれている柱廊は、幼いベンヤミンの体験の中ではダンテの地獄絵の恐ろしさを思い出させ、英雄たちは贖罪を強いられる罪人のように思われた。そしてこの戦場の「地獄」の対極にある勝利の女神の恩寵圏に集う人々は、ドイツ帝国の建国神話のもとに集う「国民」であり、至福の恣意性が作りだした被造物なのだ。この作り物の人々の周りには、「永遠の日曜日」という安息日、あるいは「永遠のセ

ダンの日」を祝う空気が漂っていた、と記してベンヤミンはこのテキストを終える。彼は1938年にこの最終稿を完成させたが、その翌1939年には第2次世界大戦が始まり、日曜日の恩寵は終わる。しかし開戦当初ドイツは勝利が続き、ベンヤミンが最後に問いかけたように、多くの国民は「永遠のセダンの日」の空気の中に居続けたと言えよう。また、1939年、この塔は、ヒトラーのメガロマニアックなベルリン都市計画「ゲルマーニア計画」のため、国会議事堂前からティーアガルテンのグローサーシュテルンに移設された。ベンヤミンは、住むことも訪れることも許されなくなったベルリンで、世界史がますます「栄光ある墓穴へと沈み込んで行き」、戦勝記念塔が新たな場所でより不吉な墓標として聳えることとなったのを、遠い亡命地パリから見やっていたのだ。

II. 『パサージュ論』(Das Passagen Werk) — 商品の夢

1. パサージュと商品 — ユートピアから廃墟へ

翌1940年、フランスもまたドイツに占領された。ベンヤミンは、ピレネー山脈を越えてスペインへの脱出を試みるが、ポル＝ボウで国境を通過できず、自ら死を選んだ。彼がぎりぎりまでパリに留まり続けたのは、ライフワーク『パサージュ論』継続のためだった。それは、「19世紀の首都」となったパリという都市と時代を、特に、資本主義の母胎とも言えるパサージュに焦点を当てて考察する研究である。



Passage Verdeau 1847年開設

『パサージュ論』は膨大な遺稿とともに未完に終わったが、その全体構想を凝縮したテキストとしてエクスポゼ「パリ — 19世紀の首都」がある。彼は冒頭の「1. フーリエあるいはパサージュ」で、パサージュ、駅、万国博覧会場などこの時代に特徴的な建築物を考察して、そこに「新しいものと古いものとが浸透し合う場となるイメージ」、集団の「願望イメージ」を読み取り、次のように述べる。

あらゆる時代は、それが見る夢の中で、自分の次の時代がイメージとなって現れるのを目の当たりにする。このとき次の時代は、原歴史 (Urgeschichte) の、すなわち無階級社会の諸要素と結び付いて出現するのである。集団の無意識のなかに貯蔵されている無階級社会の経験は、新しいものと浸透し合ってユートピアを生み出す。このユートピアは、永続的な建築物からはかないモードに至るまで、生の数限りない状況のなかにその痕跡を残してきたのだ。(GS.V.1.S.47)⁸

パサージュが、当時の先端都市において最新の「モード」や「商品」の輝きを展示して遊民を引き寄せその感覚を訓練する遊歩と消費の場だったとするなら、最先端の商品を世界中から集めた万国博覧会は、「商品という物神 (Fetisch Ware) の巡礼所」であった。「2. グランヴィルあるいは万国博覧会」で彼は、万国博覧会において商品と人間の間で起こっていることを、その快樂の仕組みに分け入って次のように描写している。

万国博覧会は商品の交換価値を美化する(verklären den Tauschwert der Waren)。博覧会が作る枠組みのなかでは、商品の使用価値が背景に退く。博覧会は幻像 (Phantasmagorie) を繰り広げ、人間はその中で気晴らし (Zerstreuung 気を散らすことでもある) に身を委ねる。娯楽産業のおかげで人間は簡単に気晴らしができるようになる。なぜなら娯楽産業は人間を商品の高さにまで引き上げるからである。人間は自らを娯楽産業の操作に委ねる。自己からの、そして他人からの疎外(Entfremdung)を楽しみながら。 — 商品が玉座につき、商品のまわりを気晴らしの輝き(Glanz der Zerstreuung)が包む。これがグランヴィルの芸術のひそかなテーマである。(GS.V.1.S.50f.)

たとえ使用価値がなくても交換価値によって作り出される「美化」が、初期の映像ショーである幻燈によるファンタスマゴリアのような幻像世界を繰り広げる。その商品のアウラに魅惑されてファンタスマゴリアに入っていく時、人は、そこで気を散らされ気を晴らされ、労働者もまた、自己から離れること(=疎外)をこそ娯楽として商品を楽しむ。商品を製作する労働と生活の場では自己と他者からの疎外があったとしても、商品の新しさと多様さが作り出すワンダーランドは労働者の欲望を誘い束の間の娯楽において癒しを与える。万国博覧会は、国民国家ごとの殖産興業の欲望が、最先端の技術や最新の流行、伝統文化のブランド化などを展示する場であったが、ベンヤミンは、この章の冒頭で、この博覧会が労働者階級に対してもっていた感情教育と機能転換の意味を強調している。

この博覧会は「労働者階級を楽しませたい(amüsieren)」という願望から始まっており、「労働者階級のための解放の祝祭になる」。労働者は顧客として前面に立つことになる。

⁸ Walter Benjamin: Paris, die Hauptstadt des XIX. Jahrhunderts. In: Walter Benjamin Gesammelte Schriften V.1. Frankfurt a.M. (Suhrkamp) 1982, S. 50.

(GS.V.1.S.50)

「物神としての商品 (Fetisch Ware)」が労働者にとって自らの労働力や自己からの疎外の産物であるにもかかわらず、労働者自身を魅了し、自己疎外をこそ気晴らしとして楽しませるアミューズメント性を有しており、労働者は労働者としてよりも顧客として市場に姿を現す。この感情教育と機能転換にスイッチを入れるのが、Fetisch Ware の Fetischismus である。

流行は有機的なものと対立する。流行は生きた肉体を無機物の世界と結びつける。それは生あるものにおいて、死体のもつ諸権利を主張する。無機的なもののセックスアピールに参ってしまうフェティシズム(Fetischismus)が、流行の生命中枢である。商品崇拜はこのフェティシズムを利用する。(GS.V.1.51.)

ベンヤミンは、このように、資本主が生み出したパサージュや商品に特有の二義性について、次のように述べる。

二義性とは弁証法がイメージとして現れたものであり、静止状態における弁証法 (Dialektik im Stillstand) の定則である。この静止状態がユートピアであり、弁証法的イメージ像(das dialektische Bild) はしたがって夢のイメージである。そのようなイメージをなしているのがたとえば商品そのもの、即ち物神としての商品であり、またたとえば家でもあり街路でもあるパサージュ、またたとえば売り子と商品を一身に兼ねる娼婦である。(GS.V.1.S.55)

ここでベンヤミンは、商品について、通常のマルクス主義とは全く異なる見方をしている。「物神としての商品」を搾取のメカニズムとして単に批判するのではなく、「夢のイメージ」をなしているものとして、「集団の無意識のなかに貯蔵されている無階級社会の経験」(GS.V.1 S.47)と結びついて出現する「ユートピア」の要素を読み解こうとしている。それは、商品の物神性を、虚偽として単純に切り捨てるのではなく、そこに含まれている「夢」「願望」の要素を掬い取りながら「物神 (フェティッシュ) としての商品」に魅惑される人間のフェティシズムそのものに分け入っていきこうとする見方だと言えるだろう。だからこそ、商品としての身体を売る女性＝「娼婦」を成り立たせているフェティシズムをも「夢のイメージ」として、敢えて「ユートピア」として（それは現実には、容易に逆ユートピアとなる）解こうとしている。

そしてこのようなブルジョアジーの夢のモニュメントの「廢墟」について、最後のパラグラフで彼は次のように述べる。

ブルジョアジーの廢墟について語った最初の人**はバルザック**である。だがこの廢墟を見渡すことは、シュルレアリスムによってはじめて可能となった。前世紀のさまざまな願望の象徴(Wunschsymbole)は、その表現である数々のモニュメントが崩壊しないうちに、生産力の発展によって粉砕された。16 世紀においては諸学が哲学から解放されたのだが、19 世紀においては生産力の発展により、造形の形式が芸術から解放された。その発端をなすのは、エンジニアが構成するものとしての建築である。写真による自然の再現がこれに続く。空想力の産物が、商業美術として実用化される兆しが見える。文学は新聞の文芸欄において、モンタージュ形式に従う。これらの生産物はすべて、商品として市場へ赴こうとしている。しかしそれらは、まだ敷居の上でためらっている。パサージュと室内、博覧会とパノラマは、この時代に生まれた。(GS.V.1.S.59)

「前世紀のさまざまな願望の象徴は、その表現である数々のモニュメントが崩壊しないうちに、生産力の発展によって粉砕された」、即ち、パサージュのような願望の象徴は、具体的な物質としてのモニュメントはまだ崩壊していないが、「造形の形式が芸術から解放される」ことによって、特有の「二義性」に満ちたスタイルは、「生産力の発展によって粉砕される」。「パサージュ」のように街路でありながらアーケードで囲われた家でもあり、物神としての商品を魅惑的に「展示」して「遊民」を魅惑する空間のスタイルは、生産力の発展によって追い抜かれ、ベンヤミンの時代に既に、より大量の商品を展示し消費者を收容できる近代建築のデパートへと変容していた。現代においては高度にコンピュータ管理されたネットワーク端末であるコンビニから量販店、グローバルなネット上のショッピングモールへと、大きく変容しながら「市場に赴き」続けている。「パリ 19 世紀の首都」そのものが 20 世紀には時代に追い抜かれ、第 1 次世界大戦後、高度資本主義の中心はアメリカへと移っていった。これら、古い形式の粉砕や解放を駆動しているのは「生産力の発展」であり、資本の力であり、現代でいうならばグローバル化を加速させる新自由主義の力である。

ベンヤミンは、このような資本主義の起源に遡り、市場に赴こうとして敷居の上で躊躇っている物たち — パサージュ、万国博覧会会場等 — を分析し、その二義性に満ちた「夢のイメージ像」の「夢」の要素をすくいとりとしたのだ。

それらはひとつの夢の世界の残滓である。目覚めの際に夢の要素を利用する(Verwertung der Traumelemente beim Erwachen) のは、弁証法的思考の模範的な例である。それゆえ弁証法的思考は、歴史的覚醒のための器官なのである。あらゆる時代は次の時代を夢見るだけでなく、夢見ながら目覚めに突き進んでいくものなのだから。あらゆる時代はその終焉を自分のなかに含んでいるのであり、この終焉を — すでにヘーゲルが認識しているように — 狡知をもって徐々に発展させる。商品経済の動揺とと

もに、われわれは、ブルジョアジーの記念碑の数々を、まだそれが崩壊してしまう前に、廃墟(Ruinen)として認識し始めるのである。(GS.V.1.S.59)

「ブルジョアジーの記念碑の数々を、まだそれが崩壊してしまう前に、廃墟として認識する」こと、その作業を、ベンヤミンは、30年代、資本主義がファシズムという破局をも生み出していく中、急務と考えていた。

III. 「小さな門」の扉の「蝶番 Angel=天使」としての〈想起 Eingedenen〉

「ブルジョアジーの記念碑の数々を、まだそれが崩壊してしまう前に、廃墟として認識する」視線—それはベンヤミン最後の作品「歴史の概念について」の中心第9テーゼで飛んでいく「歴史の天使」(Der Engel der Geschichte)の視線にほかならない。

私たち(uns)の目には出来事の連鎖がたち現れてくるところに、彼(er)[=歴史の天使]は、ただひとつ、破局のみ(eine einzige Katastrophe)を見る。その破局は次々と瓦礫(Trümmer)の上に瓦礫を積み重ねて、それを彼の足もとに投げつけている。彼はおそらくここにとどまり、死者たちを目覚めさせ、打ち砕かれたものを寄せ集め繋ぎ合わせたい(die Toten wecken und das Zerschlagene zusammenfügen)のだろう。しかし強風が樂園から吹き付けてきて、それが彼の翼にはらまれ、あまりの強さに天使は翼を閉じることができない。この強風は、彼が背を向けている未来の方へと彼をおしとどめようもなく吹き飛ばしていく。その間にも瓦礫の山は彼の目の前で積み重なっていき、天にも達しそうである。私たちが進歩と呼んでいるものは、まさにこの強風(dieser Sturm)なのだ。(傍点は原文ではイタリック GS.I.2. S.697f.)⁹

「私たちの目には出来事の連鎖が立ち現われてくるところ」に、「彼は、破局のみを見る」、とベンヤミンは書いている。「彼はおそらくここにとどまり、死者たちを目覚めさせ、打ち砕かれたものを寄せ集め繋ぎ合わせたいのだろう」、と推測されるが、この天使は強風に吹き飛ばされていくのみで、死者たちを目覚めさせ、打ち砕かれたものを寄せ集め繋げることはできない。ここには、死者と廃墟のみの風景が広がっている。しかしこのベンヤミン最後のテキスト「歴史の概念について」には、幾つかの箇所、死者を救済するメシアの姿が垣間見える。この作品の最後に添えられた補遺「<Anhang>」のBの最後の1文によれば、どの瞬間もが「メシアがそこを通過して入ってくる」可能性のある「小さな門だった」¹⁰のだ、と記されている。

⁹ Walter Benjamin: Über den Begriff der Geschichte. In: Walter Benjamin Gesammelte Schriften I.2. Zweite Auflage. Frankfurt a.M.(Suhrkamp) 1978, S.697f.

¹⁰ 「小さな門」のイメージについては、以下の拙稿を参照されたい。

三宅晶子「『小さな門』は開くのか?— ヴァルター・ベンヤミン「歴史の概念について」の最後の言葉」『東北ドイツ文学研究』No.46,2002, pp.43-75.

Den Juden wurde die Zukunft aber darum doch nicht nur homogenen und leeren Zeit. Denn in ihr war jede Sekunde die kleine Pforte, durch die der Messias treten konnte. (GS.I.2.S.704)

しかしだからと言って、ユダヤ人にとって未来が均質で空虚な時間になってしまうことはなかった。というのは、未来においては、どの瞬間もが小さな門だったのであり、そこを通過して、メシアが歩み出てくることができたのだ。

これが「歴史の概念について」の最後の文である。最後の文のその副文において彼はメシアが通過して入ってくるができる「小さな門」を立てた。そしてその文を過去形で「konnte できた」と書いた。「できた」という過去形は、普通に読むならば、今は kann と書けない、即ち「できない」のだという現実を含意しているだろう。それは、「かつては小さな門があったが、今は、そこを通過してメシアが歩み出てくることはできない」という現実＝絶望の表現となる。

しかし、この「歴史の概念について」というテキスト全体、そして彼が一生をかけてテキストに対してきた思想と姿勢を考えるならば、この最後の決定的ともいえる1文が過去形で終わっていることは、本来違和感を残すはずだ。事実、ベンヤミンは、下書きと思われる遺稿では、次のように、最後の部分はすべて現在形で書いている。

Aber sie [=die theologische Vorstellung der Juden] macht sie [=die Zukunft] darum doch nicht zur leeren Zeit. Sondern ihr ist jede Sekunde die kleine Pforte, durch die der Messias treten kann. Die Angel, in welcher sie sich bewegt, ist das Eingedenken. (GS.I.3.S.1252)

しかしだからといって、ユダヤ人の神学的表象は未来を空虚な時間にするものではない。むしろ、この表象にとっては、どの瞬間もが、メシアが通過して来る可能性のある小さな門なのだ。 この門扉を動かす蝶番が、想起である。

このように、草稿は、”die kleine Pforte, durch die der Messias treten kann“と、現在形で書かれており、この方が理解しやすいだろう。しかし、ベンヤミンは、最終稿ではそれを敢えて過去形に書きなおした。さらには、最後にあった「この門扉を動かす蝶番が、想起である。」という鮮烈な印象を残す1文を、完成稿では削除している。この最後の1文は、あたかもこの門扉を動かすためのヒントとなる鍵を、そと門の前に置くような1文だ。この1文のさらにキーワードとなるのが Angel という単語だ。この語は、ドイツ語では門扉を動かす「蝶番」を意味するが、英語では「天使」を意味する単語であり、この文字は、ドイツ語・英語両方を通して二重の表象を透かし見させる Vexierbild(判じ絵)ともなっているだろう。そしてこの重要な働きをする「蝶番」＝「天使」が、<想起 Eingedenken>なのである。だが結局彼はこの判じ絵を取り除き、kann を konnte に書き変えて、いわばテキストの現在における門を閉ざした。

しかし、ここでベンヤミンが「未来」と呼ぶ時間、それは、このテキストを読む私たちにとっては、この「現在」である。そして、読む私たちが過去のベンヤミンのテキストと出会う時、直前のテキストである補遺Aで「歴史家」に求められていたこと―「自分自身の時代が以前のある特定の時代と出会って作り出す状況配置 (Konstellation) を把握すること―を思い出すならば、私たちは、まさにこのテキストの未来において、私たち自身が、Aで言われていた「歴史家」として、ここに立つことを要請されていることを知るだろう。

Er [=der Historiker] erfährt die Konstellation, in der seine eigene Epoche mit einer ganz bestimmten früheren getreten ist. Er begründet so einen Begriff der Gegenwart als der >Jetztzeit<, in welcher Splitter der messianischen eingesprengt sind. (GS I.2.S.704)

彼 [=歴史家]は、自分自身の時代がある特定の時代と出会って作り出す状況配置 (Konstellation) を把握する。そのようにして彼は現在の概念を、メシア的な時間のかけらが混じりこんでいる<現在時>として根拠づけるのである。

即ち、補遺Aは「過去」への向き合い方と、そこに現れる「メシア的時間のかけらが混じりこんでいる<現在時>」を示し、Bは「未来」を見据えつつ、「どの瞬間もがメシアが通ってくることができる小さな門となり得る」ことを呈示することによって、読む者に互いに互いを想起させ、まさにこのテキストにおいて **Konstellation** を作り、今ここをメシア的時間のかけらが混じる<現在時>とし、「小さな門」を立てることを要求する。では、メシアはどのようにやってくるのか。「歴史の概念について」第2テーゼにおいては、次のように記されていた。

[...] Die Vergangenheit führt einen heimlichen Index mit, durch den sie auf die Erlösung verwiesen wird. [...] Dann ist uns wie jedem Geschlecht, das vor uns war, eine *schwache* messianische Kraft mitgegeben, an welche die Vergangenheit Anspruch hat. (GS I.1.S.693f.)

・・・過去はひそかな索引をもっていて、それを通して、救済へと指示される。・・・
私たちに、私たちに先行するどの世代とも同様に、かすかなメシア的能力が付与されているのであり、この能力に過去は要求する権利をもっている。・・・

ベンヤミンのテキストを読み、この「過去」にひそかにつけられた「索引」を辿っていくなれば、私たちは、そこに「救済」への指示を読むことになる。そして、死者たち、倒れ伏した者たちを救済するメシアの能力を「かすか」にであれ持っているのは、「死者たちを目覚めさせ、打ち砕かれたものを寄せ集め繋ぎ合わせたい」と願いながらも強風で翼を閉じることができず、未来へと吹き飛ばされていく「歴史の天使」(第9テーゼ)ではなくて、「私たち」、すなわち「生きている世代」なのである。「この能力に、過去は、要求する権利をもっている」。

即ち、ベンヤミン最後のテキストの最後の1語 *konnte* を *kann* へと変える能力を「かすか」にでも持っているのはほかならぬ「私たち」であり、どの瞬間もが、メシアが歩み入ってくる「小さな門」なのであり、その扉を開くことを可能にする「蝶番 *Angel*」こそが、この論文で考察してきた〈想起 *Eingedenken*〉の力なのである。